世界に通用する子どもを育てるために

本物の英語力を身につけさせよう！

大学まで英語を習ったのに満足に話すことができない――。自分の身を振り返ってみても、現状の英語教育には疑問を抱く人は多いだろう。では、本物の英語力を身につけるためには何が必要なのか。英語できちんと外国人と議論ができるエリートを育てたいと考える国際教養大学の中嶋嶺雄学長にお会いして、教えていただいた。

取材・文●岡部敬史　イラスト●黒崎　玄

国際教養大学理事長・学長
中嶋嶺雄さん

なかじま・みねお　1936年長野県松本市生まれ。国際社会学者。1947年松本音楽院（鈴木鎮一教室）入学。東京大学大学院社会学研究科（国際関係論）修了・社会学博士。東京外国語大学長、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）などを歴任。スズキ・メソードを普及する（社）才能教育研究会会長でもある。著書に『世界に通用する子供の育て方』（フォレスト2545新書）、『なぜ、国際教養大学で人材は育つのか』（祥伝社黄金文庫）、『音楽は生きる力』（西村出版）など多数。

就職率100%で話題沸騰！

国際教養大学・中嶋嶺雄学長の

本物の英語力とは？

語学というのは、頭が柔らかいうちから取り組むのが有効なのです

「秋田に起きた奇跡」に、全国から熱い視線が集まっている。

奇跡の舞台は、国際教養大学。

秋田県が母体となり2004年に開学したこの大学は、まだ10年にも満たない歴史にもかかわらず、卒業生の就職率はほぼ100%。全国的なアンケート（『サンデー毎日』（2010年9月12日号）「進路指導教諭が生徒に勧めるイチ押し大学」）を行えば、「小規模だが評価できる大学1位」「入学後、生徒を伸ばしてくれる大学第3位」という評価を得て、今やその偏差値は、東大や京大に肩を並べるという。

もちろん、これだけの成果を挙げるのには、国際教養大学ならではの特色がある。

なかでも特筆すべきは、「授業をすべて英語で行う」ことと「1年間の海外留学の義務づけ」であろうか。

グローバル化するこれからの社会にとって、何よりも大切なのが「本物の英語力」と語る中嶋嶺雄学長に、英語力の必要性、家庭教育の重要性、幼少期における英語指導法のポイントなどをうかがった。

英語を学べば、日本語の力も上がる

読者の中には「小学生に英語教育が必要なのだろうか？」とお考えの方もいるだろう。

また、「幼少期から英語を学ばせると日本語がおろそかになる」と疑問視している方もいるのではないだろうか。幼いときは、何よりも日本語が大切で、英語を学ぶことは母国語力の低下につながるのでは――世間には、このような意見も多い。

しかし、国際教養大学の中嶋嶺雄学長は、こう語る。

「最近欧州では、よく『複言語主義』という言葉が使われます。複数の言語を習得すれば、言語どうしが互いに刺激し合って、母語がより洗練されるという考え方です」

つまり、英語を学べば、母語である日本語の力も上がるし、英語以外の第二外国語に挑戦することもより簡単になってくる。言語どうしには、そういった相乗効果があるというのだ。さらに、英語を身につけると、日本語がいかにすばらしい言語であるのかにも気づくという。たとえば、英語の〝gesture〟という単語も、日本語では「身振り」「手振り」や「しぐさ」など、いろんな言葉で表現できる。英語を身につけることによって、日本語の語いの豊かさに、改めて気づくのだ。

海外で学んだことで日本のよさを知る

英語に力を入れすぎると、日本への愛着も稀薄になり、上っ面だけの国際人になりかねないと危惧する人もいるだろう。しかし、国際教養大学の学生たちの就職動向を知ると、それは杞憂ではないかと思わされる。

「学生の就職志望先でもっとも多

英語は、誰も『できない』ということはありません。学ばせ方ひとつでできるようになるのです

英語教育が必要な理由

1. グローバル化時代に必要なのは、受信力と発信力を兼ね備えた英語力
2. 複数の言語を習得すれば、言語どうしが互いに刺激し合って、母語がより洗練される
3. 英語を学び、異文化を知ることで、日本のよさや日本語の豊かさを知る人間となる

いのは、国内メーカーです。海外留学を経験した学生たちは、一様に日本を再発見してきます。海外で品質のよい日本製品が高く評価されていることを肌で感じ、日本のものづくりのすばらしさに気づくのです」

英語を学び、海外で学んだことでかえって日本のよさを知り、日本で働こうと思うわけだ。

このように早期の英語教育に対して一般的に抱かれるネガティブな意見は、どうも根拠のないものがその多数を占めそうだ。

9歳までは、耳がよく覚えも早い

ならば子どもたちには、しっかりと英語教育を受けさせたいと思うところだろう。では、どれくらいの年齢から英語に接していけばいいのだろうか。

「江戸時代、中国語の通訳を生業としていた唐通事には、『通事は9歳までに育てるべし』という家訓が伝わっていたといいます。このように語学というのは、頭が柔らかいうちから取り組むのが有効なのです」

年の数え方に「つ」がつくうち。つまり「九つ」と数える9歳までは、耳がよく覚えも早いという。

「また、岡倉天心や新渡戸稲造といった近代日本を支えた偉大な人物も、10歳そこそこから英語を学んでいます。彼らは、1873年に東京神田一ツ橋にできた、東京外国語大学の前身となる東京外国語学校で英語を学びましたが、日本語の力が弱くなったかといえ

ば、決してそのようなことはありません」

岡倉天心と新渡戸稲造は、それぞれ『茶の本』『武士道』といった日本を紹介する文章を世界に通じる英語で書き上げる。そこには、もちろん熟達した英語力があるが、それ以上に日本を理解し考える母国語力があったことに疑いの余地はない。

小学校の英語必修化は大きな一歩

「これからグローバル化する社会の中、英語ができないと、ずっと英語コンプレックスを抱いたまま生きることになってしまいます。英語は、誰も『できない』ということはありません。学ばせ方ひとつでできるようになるのです」

母国語を話せない人はいない。言葉というのは、その学び方を間違えなければ、誰でも話せるようになるというのが、中嶋学長の考えだ。だから、できるだけ早い時期から英語に接することが大切で、この観点からいえば、2011年4月から小学校の高学年で英語が必修化となることは画期的なことだと中嶋学長は語る。

「とはいえ、現状の年間35時間、それも正規の教科ではなく『英語活動』という位置づけは満足いくものではありません。本当は1～2年生の頃から異文化と触れ合うことを始め、5～6年生ではしっかりした教科としてやるべきです」

小学校で英語の時間が確保されたことは大きな第一歩。しかし、まだまだ満足のいくレベルでは決してないという。そこには、中嶋学長が目指す英語力が、従来の「試験だけできる英語」とはかけ離れたものであるからだ。

「本当の意味での英語力とは、英字新聞が読めてCNNやBBCなどの放送も理解でき、そのうえで諸問題について自分の意見をしっかり述べて、きちんと外国人と議論ができるということ――。グローバル化時代に必要なのは、こういった受信力と発信力を兼ね備えた英語力なのです」

中嶋学長は、「ひとつの言語を覚えることは、自分の世界がひとつ増えるということ」だという。これからの社会、子どもたちの世界は、たったひとつでいいのだろか――。その答えは自明のことだろう。

発信力の差は英語力の差

また、子どもたちが世界を広げることは、この日本が力強く成長することとも密接な関係がある。

「今の世界では、日本企業はその製品力の高さにもかかわらず、サムスンなどの韓国企業に比べると停滞している状況にあります。この要因は、発信力の差。すなわち英語力の差ともいえるのです」

つまり英語力は、もはや国力をも左右する力といえるのだ。日本の国力のためにも、幼少期からの英語教育は、もはや不可欠になっている。

ひとつの言語を覚えることは、自分の世界がひとつ増えるということ

国際人に必要な豊かな教養は、お金や塾では育たない 1冊の本から始めよう！

国際教養大学のある秋田県は、2007年度から始まった小中学校の全国学力テストで4年連続1位になっている。しかし、秋田県における塾の数は、極めて少ない。

「秋田県が好成績である原因は、家庭にあると思います。朝食、夕食を家族全員で規則正しくとる。家庭には両親だけでなく、祖父母もいる。こういったなにげない家庭の安定が子どもたちによい影響を与えているのでしょう」

家庭教育こそが何よりも大切

事実、同じ秋田県でも寒村部に行けば行くほど、成績がよくなるという。これには、授業が少人数で行われているという要素もあるようだが、やはり大都市で進む核家族化と対極にある家庭環境が、子どもの成績にプラスに働いているのだろう。

「私は家庭教育こそが何よりも大切だと思っています。グローバル化した社会を生き抜く子どもを育てるために基礎となるのが家庭教育。家庭で物事を学ぶ姿勢や、人と接するためのマナーなどを身につけさせることが大切なのです」

そのためにも、きつくしかったり過度に甘えさせたりするのではなく、親が根気よくしつけていくことが大切なのだ。

「これまで、家庭教育は何かと軽んじられてきました。しかし、教育基本法の改正で、第十条に『家庭教育の責任』が記された（＊）ことは、喜ばしいことです」

ただ、家庭教育が重要といわれても、具体的に何をすればいいのだろうか——。そこで中嶋学長が家庭で行ってきた子育てについて具体的に教えていただいた。

家庭での必読書を決める

「わが家で行ったことといえば、必読書を決めたことでしょうか。オーストリアの作家シュテファン・ツヴァイクの伝記文学『マゼラン』と井上靖の『おろしや国酔夢譚』は、中学生時代に4人の子どもに読ませました」

どちらも歴史の教科書では、あまりくわしく触れられない冒険譚だが、こういった物語からリアルな歴史を垣間見ることができる。中嶋学長は、多方面から歴史の真実を知るという知的な喜びを教え

中嶋学長が推薦！　家庭での必読書

モモ

ミヒャエル・エンデ：著・イラスト
大島かおり：翻訳
岩波書店／1,785円（税込）

不思議な力を持つ少女モモが奪われた時間を取り戻す、冒険ファンタジー。小学校中・高学年から。

ちびくろサンボ

ヘレン・バナーマン：著
フランク・ドビアス：イラスト
径書房／840円（税込）

ご存じ「ちびくろサンボ」という男の子の物語。絶版になった名作・岩波書店版『ちびくろ・さんぼ』を忠実に再現。低学年から。

マゼラン 最初の世界一周航海

長南 実：翻訳
岩波文庫
987円（税込）

16世紀に活躍したポルトガルの探検家フェルディナンド・マゼランの生涯を描いた伝記物語。

おろしや国酔夢譚（こくすいむたん）

井上 靖：著
文春文庫
610円（税込）

江戸時代に嵐に遭ってロシアに漂着し、時の女王・エカテリーナ二世との対面を果たしてきた商人・大黒屋光太夫を主人公にした物語。

るためには、史実に即した伝記や冒険譚を読ませることがとても大切だと考えているという。

子どもに好奇心を持たせるようにする

「ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』も子どもたちに読ませましたね。この本は、いちばん下の子が読み終えたときに、舞台である南ドイツに家族旅行に出かけました」

家族がみんな同じ本を読んでいると、共通の話題ができる。また1冊の本をきっかけに家族旅行にも行ける。必読書を決めるという簡単な方法でも、子どもたちに与えるプラスの効果は計り知れないものがある。

「家庭教育でも、子どもに何かをさせるときには、しっかりと説明する必要があるでしょう。『この本を読みなさい』と本を与えるだけでは、なかなかうまくいきません。なぜ、その本を読まなくてはならないのか。その本の何がおもしろいのか。こういった要点を子どもが興味を持てるように語り、好奇心を持たせる必要があるのです」

子どもにとって大切な家庭教育は、こういった細かいことの積み重ねの上にしっかりと根を張って成果を生み出していく。「お金をかければいい」「塾に通わせさえすればいい」という考え方を捨て、「家庭教育」にこそ、まず目を向けるべきなのだ。

＊平成18年に改正された教育基本法において「家庭教育の責任」に触れた部分は以下のとおり。
第十条　父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。
2　国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習の機会及び情報の提供その他の家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるよう努めなければならない。

小学生から始めればバッチリ！

耳から聞いて覚える英語

これから必要になってくるであろう幼少期における英語学習。ただ、その必要性を認識しても、具体的な方法で頭を悩ませるケースは多いだろう。そんなときひとつのヒントとなり得るのが、幼少期における英語教育法としてその骨子がとても役立つと中嶋学長が考える「スズキ・メソード」だ。自ら会長を務める才能教育研究会が普及している。

スズキ・メソードとは、ヴァイオリニストの鈴木鎮一氏によって創始された音楽を通して人間を育てる教育法。そのポイントは、「暗譜」と「くり返し」にあり、脳の柔らかい幼児のうちから耳で聞いて覚え、くり返し練習することで習得していくという。

先に進むよりも習ったところをくり返す

この方法は、語学習得にも有効で、とにかく「耳で聞いて覚えて話す」ことをくり返せば、英語も話せるようになると中嶋学長。

「英語学習で大切なのは、とにかく反復することです。日本の親は、レッスンから帰った子どもに『どこまで進んだ？』と聞きがち。つまり先に進むことをよしとしますが、そうではありません。先に進むよりも習ったところを反復練習することが大切なのです」

というのは、学問全般において、何よりも大切なのは反復練習によって型を作ること。つまり基礎固めだからだ。

「ピカソやマチスといった画家は、奇抜な抽象画で有名ですが、最初からああいった絵を描いたわけではありません。絵筆を握った当初から、ものすごい量のデッサンをしているのです。つまり基礎の反復によって自分の型を作った。この型をしっかり作ったからこそ、あるところから解放されて自由に描けるようになったのです。これが個性というものです」

型もできていないうちに勝手気ままに描いたものなど、個性でもなんでもないという。本当の意味での「自由でクリエイティブな創造性」とは、自由奔放にやらせた